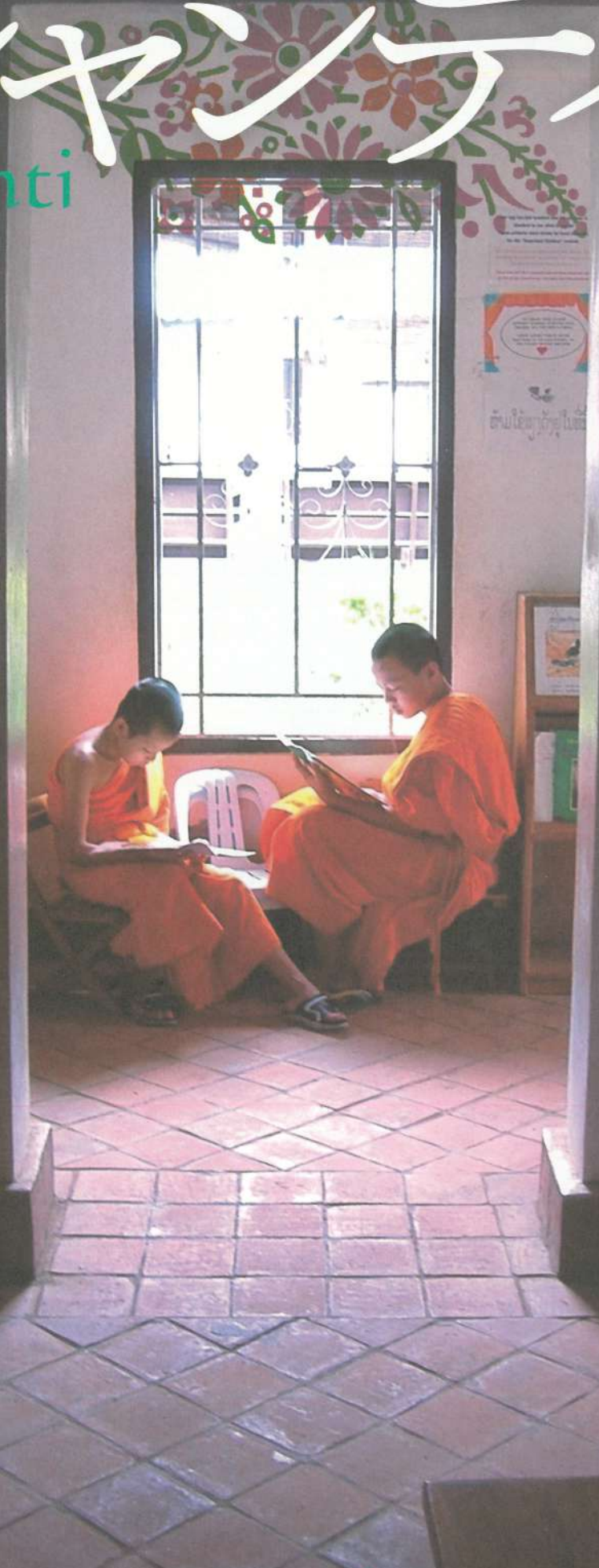


シャンティ

shanti

2009
夏
7月号

SVA流 特集
ラオスの歩き方



手を、とりあうこと。

私たちは向き合います。苦難の中にいる人々と世界に。



社団法人 シャンティ国際ボランティア会

プロジェクトの風景

a Scene of Our Project

Scholarships
in
Thailand



タイ ミャンマー(ビルマ) 国境沿いの村 「カレン族の奨学生」

モヨさんは20年ほど前、生活のためミャンマー(ビルマ)から国境を越えタイ側へきたカレン族です。その話を長男ミウくんがタイ語に翻訳してくれました。「息子に自分と同じ苦労はさせたくない。高校にも通わせたいが、学費の捻出は簡単ではない」。モヨさんは節掘りや小作で生計を立てています。家族はいまだ国籍を持っていません。

教師が変われば 村が変わる

アジア地域ディレクター 八木澤克昌

「まるで奇跡のようだ」。カンボジアのシエムリアップ州辺境の村にある小学校でのことである。新しくなった校舎はもちろん、児童も校長もまるで別人のようになっていた。

建設前の校舎は草葺きの屋根と柱だけの、これが学校かと思ってしまう建物だった。周囲の森では今でも不発弾や地雷が発見され、土地は痩せているうえに、慢性的な水不足。厳しい環境だった。

道

巻頭言

2008年10月、日本からの支援でSVAは小学校校舎を建設した。同時に州の教育局から先生が3人派遣されたが、36歳の校長は昼間から酒を飲んで顔を赤くしている。不安なスタートだった。

ところが、4ヵ月後の今年1月、小学校には信じられないことが起こっていた。132人だった児童が264人に倍増しており、子どもたちは表情も明るく、サッカーやゴム跳びなどでいきいきと遊んでいる。貯水タンクを備え、セラミックの浄水器で安全な水を確保して、いつでも飲める



ようになつていった。花や野菜が子どもたちによって植えられ、教室や図書室、校庭、トイレも子どもが当番を決めて清掃しており、清潔感にあふれている。

この劇的な変化の背景には校長の存在が欠かせない。村の誰に聞いても「校長が変わった」と口を揃える。校舎の建設と同時に酒を断った。「学校が忙しくて、酒を飲む暇はない」と仕事に打ち込んでいる。毎日、村人の家を訪ねて、子どもを学校に行かせるように説得していた。

この村は元ボル・ポト派の支配地域。住民は全国からの寄せ集めで、もめ事が絶えなかった。しかし、新しい校舎の建設を契機として教師と学校が変わった。子どもが活き活きすると大人も変わり、村全体が変わっていく。「学校を作る事は村作り、人作りだ」と実感させられた出来事だった。



① 毎朝、ムーイ川を越えてタイへ通学する奨学生のバリチャットさんは高校1年生。
② タイ西北部ターク県ターソンヤン郡はムーイ川を挟んでミャンマー(ビルマ)と国境を接している。
③ 村の分校。
④ 4輪駆動車でないと移動が難しいほどの山地にあるカレン族の村。
⑤ 話を聞かせてくれたモヨさんと長男でSVA奨学生のミウくん(左・15歳)
③④写真:瀬戸正夫

SVAタイランドでは、2008年ターク県ターソンヤン郡のカレン族中高生60人を対象に奨学金を支給しました。郡の大部分は山。その中に点在する村には電気、学校といった公共サービスが整備されていません。そこに住む少数民族の人びとは、教育が不十分なため就職が難しい、最低賃金さえ保障されない職場で働かざるを得ない状況にあるなど、タイ社会の中でハンディを負っています。より困難な状況にあるこの地域の子どものために、SVAタイランドでは今年も引き続き活動を行っていきます。(SVAタイランド 松尾久美)

地球に 絵本の タネをまく

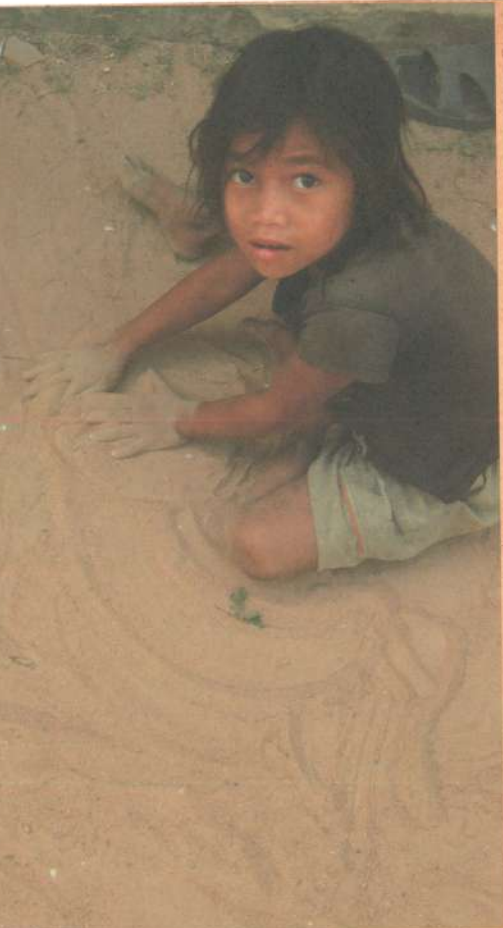
vol.2

一冊の絵本がもつチカラは無限の可能性を拓けてくれます。子どもの手に届いた瞬間ひらく想像力の翼、字をおぼえる喜び。そんな「タネ」をどんどんまいていきたいとSVAは考えています。

タネをまく前にしなければいけないのが、その土地をたがやすこと。SVAは紛争地、スラム、辺境地、難民キャンプなど「一番困難な土地」で活動をおこなっていますが、大切なのは子どもたちや住民と手を取り合いながらすすめることです。必要な援助はなにかを知るために、地元の行政機関(教育局など)と協力して調査を行うこともそのひとつ。

新人だった時、一緒に村に行った先輩スタッフが「はだして歩こう」と言ったことが印象に残っています。はだしてかけ回る子どもたちと同じように、土の温かさや感触を知ることが大切なんだよ、と。この視点を持つことが、SVAの理念「共に学び、共に生きる」を活かした活動をするために欠かせません。

たがやす



SVAの使命

私たちは、地球上の貧困や戦争、内紛、環境破壊、災害などによって苦しむ人々のそばに立ち、苦しみを分かち合い、その人々と共に解決のための活動を行います。特にアジアにおける教育・文化活動を通じて、「共に生き、共に学ぶ」ことができるシャンティ(平和)な社会の実現をはかります。

Cover Photo

表紙:ラオス、ルアンパバーンの公共図書館で本を読む少年像 [撮影:高橋久夫]

SVA流 ラオスの歩き方

特集



写真：瀬戸正夫

みなさんはラオスと聞いて、なにを思い浮かべますか？

ラオスに行った人は、口々にその魅力を語ります。「ポーベンニャン（大丈夫）」と微笑む人びと、雄大なメコン河に沈む夕陽。そこではゆるやかな時の流れを実感できます。

「ニューヨークタイムズ」の「2008年に行きたいところ」第1位に選ばれ、「インドシナ半島で1番ホットな国」と観光面でも注目されているラオス。

南北に細長い国土は24万km²。日本の本州とほぼ同じ面積で、山岳地帯が8割を占めています。人口は約580万人で日本の25分の1。隣国タイ（約6300万人）やベトナム（約8600万人）と比べても少なく、8割が農業に携わっています。60%がラオ族で、他に49の少数民族が暮らしており、多様性に富んでいます。

SVAは活動地の伝統と文化を大切にしています。事務所で働くのは日本人スタッフ2人と、ラオス人スタッフ10人。

経済発展にとまない、今までの良さが失われるのではないかと危惧する声もあがっている今、ラオスでSVAが活動する意味も考えてみましょう。

さあ、ラオスへようこそ！

※各国の面積と人口：「外務省 各国・地域情勢」



Q ラオスって何語を話しているの？

ラオ語が公用語。ラオ語は東北タイ語と似ており、多くのラオス人はタイ語もわかりますが、少数民族は独自の言語を持っていて、ラオ語がわからない場合もあります。

Q 通貨は？

キープ（Kip）。現在は、1ドル＝約8400キープ。USDルやタイバーツで支払いができるお店も多いですが、お釣りはキープで渡されます。地方の駄菓子屋でもタイバーツが使えるところが多いのです。

Q どんな気候かな？

雨季（6～10月）と乾季（11～5月）に分かれますが、日本と同じく南北に長いうえ、周りを山で囲まれているので、地域によって気温差が大きいのです。一番暑い4月には42℃の日もある一方、北部の山岳地帯の冬には20℃以下、寒さの中、研修会を行いました。

Q 宗教は？

大半が仏教徒ですが、キリスト教徒やイスラム教徒もいます。国教はありません。仏教寺院では早朝から托鉢をする人たちの姿が見られます。仏教が生活に根づいていて、人生の節目に寺院が関わるのは日本と同じです。

Q ラオスの学校制度は？

小学校5年、中学校3年、高校3年、大学5年で、義務教育は小学校だけ。「スクール・クラスタ」という聞き慣れない制度があります。「クラスター」とは、どの「房」のこと。地域の核となる学校（中心校）を整備して、研修や補助教材の作成を行い、地域全体の教育の質を上げるのが目的です。

Q SVAがラオスでしている活動は？

1992年に事務所を設立して以来、教育・文化支援活動を続けています。学校建設、図書館活動、伝統文化保存活動などの事業を行ってきました。目的は戦争や植民地化で翻弄された人びとの誇りを、教育や伝統文化を通じて取り戻すこと。また、国の発展を担う人材の育成を、ラオスの人たちとともに進めています。

ラオスを知る6つの質問



ラオス担当木村がお答えします

日本からバンコクを経由して約8時間のフライトで到着！まず知っておきたいことは6つ。SVAの活動地も地図でご案内します。



- ラオス事務所
- 子どもの家
- SVAが支援している公共図書館。
- 小学校の建設地。村民も参加し「自分たちの学校」という意識を高めている。
- 移動図書館。絵本が読み、歌やゲームもあり、子どもたちは大喜び。
- 本が100冊以上入った図書箱は、図書館のない地域で活躍。

I ♥ LAOS わたしの好きなラオス

児玉陽子（愛知県・公務員）
6年前、初めてラオスを訪ねて、懐かしい感じがするこの国が好きになりました。人々は恥ずかしがり屋で、はにかんだ笑顔が素敵です。たいていのことは「ポーベンニャン（大丈夫）」と許してくれる大らかさとともに、人が集まれば、いつでもどこでも歌って踊り出すパワーもあります。ラオスでのお楽しみは、手織りの美しい布を見ること。そして、メコン川に沈む夕日を見ること。心地よい風に吹かれ、耳にラオスの音楽が届けば最高！おっと、おつまみのピンカイ（焼き鳥）も忘れてはいけません。ラオスの人と自然から元気をもらおうと、日本に帰ってもまた頑張れます。

ラオスの街角から

ラオスの首都ヴィエンチャン

でまず感じるのは、「街が静かだ」ということです。バンコクやホーチミン、プノンペンなどの周辺国の首都から来ると、びっくりするほど静かです。周辺の国と比べて人口もすくなく、街の中心地でも人ごみというものをしません。車やバイクは年々急増していますが、それでも車はクラクションをほとんど鳴らしません。街の中で大声で怒鳴っている人や、喧嘩をする人も皆無。「ニコニコと微笑を絶やさず、穏やかに毎日を平穏に暮らす」のがラオス人の考える幸福のようです。

ヴィエンチャンはメコン川に沿って広がる街です。季節によって表情を変えるメコン川沿岸には多くの屋外レストランや露天が店を連ねており、涼しくなる夕方すぎから川沿いをぶらぶらするのがヴィエンチャン子の楽しみです。

また最近ではスポーツを楽しむ市民が大変増えました。夕方の公園や広場はジョギングやウォーキングをする人で一杯です。
(川村)

街にはカラフルなものがいっぱい。果物に野菜、屋台、お供え物まで？
ラオス生活2年目、鈴木淳子がご案内します。



タートルアン

ピッカピカに輝く黄金の塔。正方形になっているので、どこから見ても同じ景色になる。夕日に輝くタートルアンは眩しくて20秒も直視できないほどの輝きを放つ。

パトウーサイ



トンカンカム市場

なんでもある。ラオス人の大好物の孵化寸前の卵も、NITSUBISHI製の扇風機も、化学調味料の「味の王」も売っている。

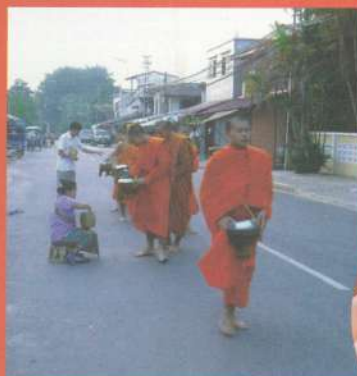


水かけ祭り

水をかけてその人の健康とご多幸を祈願する。遠慮なしにかける。「この後、日本国大使館で打ち合わせがあるのですが」と言っているスタッフにも水をかける。水をかけられた方はちゃんと「ありがとう」とお礼をする。



托鉢



毎朝5時半、空にはまだ月があるころ、我が家の大家さんの奥さんは托鉢をしている。土曜日、日曜日、盆、正月も、雨の日も、曇りの日も変わらず毎朝5時半。今回の撮影で、お坊さんは裸足だったことに初めて気がついた。

トウクトウク



ラオスの庶民の足。早朝でも、深夜でも、盆でも、正月でも、いつでもつかまる庶民の味方。

フランスパン

袋に入れる前に炭火で炙ってくれる。芳ばしい香りに耐えられず、自転車に乗りながらかじってしまう。「なます」(細切りにして酢漬けにした大根と人参)を挟んで食べる人もいます。



ラオスコーヒー

ラオスに来たら必ず味わって欲しい。時々、コーヒーの量よりも練乳の方が多くなることもあり、甘々コーヒーになる。しかし、疲れたとき、この甘さを無性に欲する。



カオピヤツク

「日本のうどんに近い」とよく言われる麺料理。うどんとの大きな違いはカオピヤツクの麺が米粉でできていること。「カオピヤツクが無かったら、ラオスでは長く暮らせなかった」と言っても過言ではないほどの逸品。



スイカ



市場でも街道沿いでも、そこら中で売られている。ラオスでも蝉が鳴き始めるとスイカが売られる。やっぱり中は赤かった。

伝統衣装



小学校、中学校、高校、大学、銀行、警察、軍、省庁、そして、SVA ラオス事務所へ通う女性たちは「シン」を履く。巻きスカートになっているので、男性諸君の視線を気にせず大またでも歩けるし、自転車にも乗れる。太っても、痩せても買い換える必要がないくらいになっている。



野菜

ラオスのキュウリは皮を剥かないと食べられたもんじゃない。インゲンはずごくながい。50cmは優にある。白菜は日本と同じだった。



お供えもの

生活必需品となっているお供えもの。女性たちがお隣さんと話しながらバナナの葉を重ねて上手く作りながら、売ります。口も手も動き続けている。



マック・クワイ

バナナがこんな風になっていたとは知らなかった。まだ青くてもリリ食べる。ラオスではバナナを焼いて食べ、煮て食べ、揚げて食べ、ジュースにかけて飲む。



おはじき

校庭にある石ころでおはじきをしていた。「キレイなガラスの玉じゃないと、おはじきが出来ないの！買ってえー！」と、駄々をこねていた幼少の頃を思い出した。



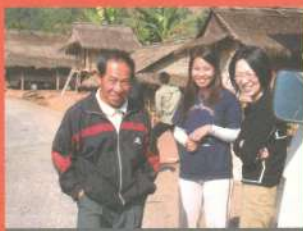
I ♥ LAOS わたしの好きなラオス

サヤコン・マライカム (東京都・ラオス人留学生)

ラオスでは親戚も家族として一緒に暮らすこともあり、大家族が多いです。うちは父母、兄の家族5人、私達夫婦、いとこ2人の計11人。家に帰ると必ず誰かがいるので落ち着きます。

朝食は、子どもはパンと豆乳か牛乳、大人はコーヒーとチャップコアイ(ラオス風のドーナツ)、パンクワン(ベトナム風の春巻き)です。もち米と卵焼きとラオスの辛味噌(チャイボン)というラオス風の朝食は、もち米を炊く人が少なくなっただけで、洋風の朝食に変わってきました。

ゆっくりしていたラオス人の生活も時間に追われるようになってきました。でも、夕食だけはそろって取る家庭が多いです。



文・写真 鈴木淳子
写真右が筆者、中央の女性は総務担当スタッフのピットサマイ、左はドライバーのカムチャン。シェンクワン県で図吉箱配布の研修会を終えて、ヴィエンチャン首都に帰る道中。



ラオスの人たちの暮らishi

大家族で助けあっているラオスの人たちの生活の様子が知りたくて、SVAラオス事務所に勤める現地スタッフ、幼稚園の先生の家庭を訪ねてみました。



タヴィスック・アヌウォン
(女性・30歳・SVA経理担当スタッフ)
家族構成 6人
本人/夫/子ども/夫の弟と妹/いとこ
一か月の食費 500ドル

夫の仕事はコンサルタント。弟と妹、いとこは学生なので、夫と私の収入で、6人分の食費や交通費をまかなうのがけっこう大変。夫の仕事も契約制で不安定なので、でも両親や兄弟と助けあってやっている。最近、日本の中古車を買った。もうすぐ2人目の子どもが生まれるが、いい学校に通って、しっかり勉強して欲しいと思っている。いつか家族でお店を開くか、小さなビジネスを始めるのが夢。



アレキサイ・パムアン
(男性・36歳・SVA図書館事業課スタッフ)
家族構成 7人
本人/妻/子ども2人/妻の妹と子ども3人
一か月の食費 300ドル

妻と共稼ぎだが、同居している妹家族の食費を助けているので、家計は大変。妻が公務員なので、政府の住宅に住んでいる。電気代や水道代が安く、その点では助かっている。しかし、ずっと今の家に居られる保証はないので、いまから貯金をして、自分の家と車を持ちたい。子どもには、教師など専門職につけるように良い教育を与えたいと思い、がんばっている。



ピットサマイ・シットパスート
(女性・29歳・SVA総務担当スタッフ)
家族構成 7人
本人/両親/兄/弟/めい
一か月の食費 500ドル

両親は自営業で、兄、姉、自分は勤め人。家が小さいため、一部屋で3人が寝起きている。近くに住む兄弟姉妹8人で助けあって暮らしているし、両親も元気で順調。米・野菜・肉などをすべて買っているため、食費がかさむ。結婚したら、やっぱり夫の家族か自分の両親かどちらかとは同居したいと思っている。両親の夢は、子どもたちが兄弟で協力して、レストランか商店を開いてくれること。



プアライ・パーニータム
(女性・私立幼稚園教師、兼業農家)
家族構成 6人
本人/夫/両親/弟/姉の子ども2人
一か月の食費 250ドル

職場がヴィエンチャン首都の中心にあってバイクでの通勤が大変だけど、仕事は大好き。週末は農業もするので忙しいけど、両親と一緒にみんなで暮らすことができ、幸せ。姉は未亡人で子どもを私たちに預けてタイに出稼ぎに行っている。早く帰って来て欲しいが、ヴィエンチャンで仕事を探すのは難しい。夫は公立小学校の教師。子どもは2人欲しい。教師か医者になってくれたらと思っている。

数字で見るラオス

男 82.5%
女 63.2%

成人の識字率。(※1)
日本ではほぼ100%。

36%

中学校への進学率。(※1)
日本では99%。

453人

在ラオス日本人の数。(※2)
在タイ日本人は41,384人

678ドル

国民ひとりあたりのGDP。(※3)
日本は34,326ドル(2007年)

64歳

ラオス人の平均寿命。(※1)

出典
※1-UNESCO Institute for Statistics, 2007
※2-2007年外務省調べ
※3-ラオス政府統計

■ちなみに、農村の世帯では現金収入は月額20〜30ドルほど。何100ドルもの食費がかかる都市部に比べ、農村では米野菜・家畜など、家族の食料を自給自足しているため、現金は使う機会が少なかった。しかし、最近では貨幣経済が農村にも及び、タイへ出稼ぎに出る農民も増えてきている。

ラオスの歴史と経済

大国に翻弄されつつつけたラオスの歴史と悲劇

1945年3月、第二次世界大戦末期、日本軍の仏印(フランス領インドシナ)処理によってフランス植民地政府は打倒され、ラオスはフランス支配から一旦は開放された。しかし同年8月、日本の敗戦によって再びフランス軍がラオスを制圧し、ラオス独立を求める民族主義者との騒乱の時代が続くこととなる。フランスの植民地時代は1893年から60年にも及んだ。フランスは愚民政策(為政者が民衆を無知の状態に陥れる政策)をとり、ラオス国内の教育制度を整備しなかった。フランス語を公用語とし、小学校3年生以上にはフランス語で教育を受けさせ、高等教育はベトナムで行なわせるのみであった。フランスはベトナムを重視し、ラオスとラオス人を軽視した。この60年の植民地時代が、ラオスにおける人材の育成や教育の普及、ラオス語の発展をどれほど妨げたことだろうか。

1954年、ジュネーブ協定によって、ようやくフランスからの独立を得たのもつかの間、1960年代半ばから、ラオスはベトナム戦争に巻き込まれていくことになる。ラオスは世界で最も不発弾、クラストー爆弾に汚染された国だ。ベトナム戦争中、北ベトナムの輸送路「ホーチミンルート」を攻撃するため、アメリカ軍によってラオスに落とされた爆弾は300万トンといわれる。当時のラオスの人口は約300万人であり、一人当たり1トンの爆弾を落とされたことになる。それらの爆弾の中でも、最も非人道的なものが「クラストー爆弾」。大型のケースの中に子爆弾が数百個詰まっているものだ。ラオスに落とされたものの多くは、野球のボール大の丸いものやパイナップルのような形をしたもので、1964年から73年の間に、2億6千万発のクラストー爆弾が落とされ、そのうち計算上8千万発が不発弾として残っていると考えられている。

農地の37%が汚染され、いまでも毎年多くの子ども達が不発弾をボールと間違えて遊んでいるうちに手や足を失ったり、命を落としている。今までに撤去できたのは40万発だけで、今のペースだと200年かかってもすべて撤去できないと言われている。



【写真】①③:高橋久夫 ②④:瀬戸正夫
①米軍が落とす爆弾の残骸。南部ではあちこちで再利用されているのが見られ、大量に投下されたことを実感する。
②南部のバクセー市にある中華寺院。
③表紙に載っているルアンパバーン図書館はフランス時代様式の建物。
④タイからのトラックの群れも増えている。

中国に経済侵食されつつあるラオス

ヴィエンチャンでは2009年末に行なわれるSEAゲーム(東南アジア諸国のスポーツ大会)開催に向けて、急ピッチで準備が進んでいる。2万人収容のメイン競技場建設など1億ドルの支援の見返りに、ラオス政府は中国に新都市(中華街)の建設の許可を与えた。数10年の契約期間内に、数万人単位の中国人に滞在許可を与えるという。こうした「見返り支援」攻勢はすでに進行中で、2年前に首都郊外には巨大な中国マーケットがオープンし、それにあわせて多くの中国人がラオスに流入してきている。

中国人だけではない。ここ数年韓国企業やベトナム人の進出も著しい。世界の最貧国にランクされるラオス。しかし近年は年7%台

の順調な経済成長を続けており、政治も治安も安定していることから、外国人からは次のビジネスチャンスと見られているようだ。こうした外国資本の流入によってラオス人が恩恵をうけるのであればいい。しかし、中国の見返り支援に象徴されるように、投資も支援も、金を出す側の利益の追求に過ぎず、ラオスの将来やラオス人の幸福のことは、二の次にされているように見える。

人口60万人の首都ヴィエンチャンに、数万人もの商魂たくましい中国人が移り住んだ時、伝統を重んじ、人が穏やかに慎ましく暮らしてきたラオスの生活はどのようなふうに変わっていくのだろうか。歴史的に長く大国に侵略され、植民地となり、35年前によく建国した社会主義国ラオス。しかし、今度には経済的に大国に侵食される危機に瀕している。(川村 七)

成長を信じ、心を育てる

SVAラオス事務所長として事業運営にあたる川村仁が心がけている「私たちの支援に大切なこと」とは

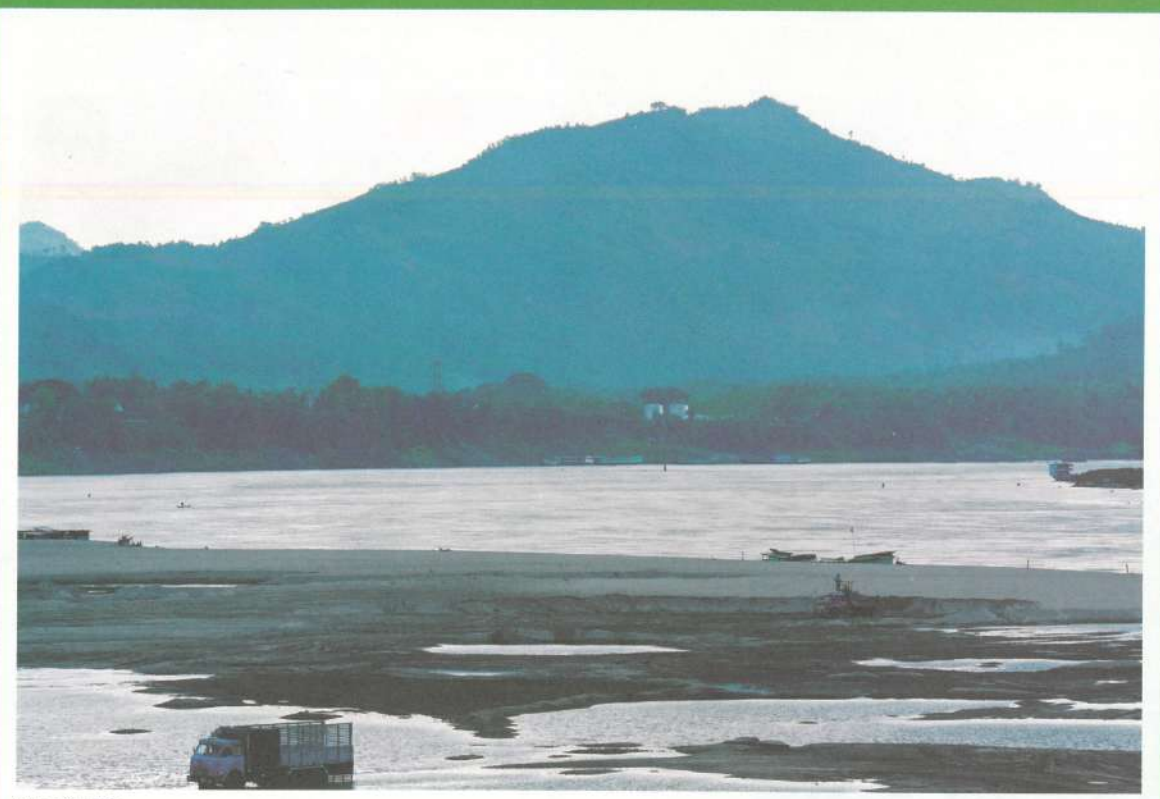


ラオス案内人紹介

川村仁 (p.8, 9, 10 文)
1962年長野県出身。大学卒業後、YMCAで12年間青少年教育活動に携わる。SVAラオス事業の調整員募集の案内を見て「自分に与えられた運命」だと感じ、1999年SVA入職。ラオス事務所勤務。

鈴木淳子 (p.6, 7 文・写真)
静岡県出身。2004年SVA入職。東京事務所、アフガン事務所を経て、2007年10月ラオス事務所赴任。「知って欲しい魅力も問題も盛りだくさんのラオスを実感してみてください」

木村万里子 (p.5 文)
群馬県出身。2007年SVA入職。2年間緊急救援を担当。2009年2月東京事務所海外事業課ラオス担当となる。5月にラオスを視察して帰国したばかり。ラオスでのおすすめはマッサージとピア・ラオ。



写真：瀬戸正夫

7年ほど前だったと思う。

いまでも忘れられない光景がある。私が当時担当していたユースボランティアグループのラオス人大学生30人が孤児のためのキャンプを企画した。6カ月の研修トレーニングの最後に、実際のボランティア活動を企画したものだ。

ヴィエンチャン首都から70キロほど離れたところにある孤児の寄宿学校から60人ほどの中学生を招待した。3泊4日のキャンプ中、参加した中学生たちはどこか緊張し、おどおどしているように見えた。食事は無言でまったく残すことがなかった。

私はどこか積極的に参加してこない子どもたちに、プログラムがうまく盛り上がりすぎずいららしていった。最後の夜はキャンプファイヤだった。お寺の境内の広い草原に小さな火をたいて、皆が丸く囲んだ。「楽しかったキャンプも明日で終わりだね。いまの自分の気持ちを一人ずつ話そう」リーダーが促すと、さっと一人の少年が手を

を挙げた。

「ぼくには両親がいません。生まれてからこれまで、お兄さんお姉さんたちにこんなに優しく大切にしてもらったことはありませんでした。このご恩は一生忘れません」
そういうと少年は、30人近いリーダー一人ひとりの前で地面に頭をつけ、泣きながら「ありがとうございました」と手を合わせるのだった。

子どもたちもリーダーの大学生も皆その姿に涙を抑えられなかった。空には雲ひとつなく、月がまぶしすぎるほど輝いていた。美しい光景だった。そのとき私は自分を恥じた。私は事業の体裁のみを気にして、子どもたちの人生やその心の中までを考えていたのだろうか。

翌日キャンプが終わり、子どもたちを寄宿学校に送りどけた。先生に学校を案内してもらって驚いた。小学生から高校生70人が暮らしているほろほろの寄宿舎では、小さなベッドひとつに子どもが3人で寝起きしていた。また食堂に

はイスがひとつもなく、立ったまま5分まで食事をするのだという。

私

たちSVAは小学校や図書館を建設し、本を出版し、子どもセンターを運営する。しかしそうした目に見えるものを作って終わりののではない。その先にある子ども一人ひとりの成長と人の変化が私たちの願いだ。だからこそSVAは「絵本」や「おはなし」に力をいれるのだ。

子どもたちは、優れた「おはなし」から人としての善と悪を学び、人生の楽しみや悲しみを知る。読書によって理想の生き方を考える。目に見えないものの価値を認めるのは難しい。しかし、私たちの支援はいつも子どもたちの心の成長につながるものでありたい。

たった3泊の経験が、あの少年にとって人生で最も幸福だった時間として一生心に刻まれ生き続けるように、絵本やおはなしは人生の道標として子どもの成長をずっと導いてくれるだろう。その力を心から信じている。

SVA activity reports

タイ Thailand ミャンマー(ビルマ) 国境沿いのスラムを調査

バンコクの1000を越えるスラム地区では、住民とNGOが協働して行った居住権を求める運動の結果、上下水道や道路など社会基盤が整いつつあります。しかし、タイの中に新たにスラム地区ができています。

ミャンマー(ビルマ)との国境沿いの町、ターク県メソット郡のゴミ集積場にありま

す。
ここに住むのはミャンマー(ビルマ)から仕事を求めてやってきた人たち。彼らのようなミャンマー人労働者が、タイには150万人いると言われて

います。警察による強制送還にいつ遭うかも知れない不安定な暮らしの中で、学校に通える子どもは全体の半数です。ここに住む青年は片言のタイ語で「何回、警察に追い返されてもみんな戻ってくる。あつち(ミャンマー)にいたら生活できないんだよ」と語ります。

今年、SVAタイランドでは、ターク県内の60カ所を超すミャンマー人労働者のコミュニティの調査を実施します。同時に写真のゴミ集積場を含めた困難な地区10カ所に対して移動図書館活動を行います。



SVAではブノンペン市内のスラム10カ所で、移動図書館活動を行っています。スラムの子どもたちは貧困の中で生きるために働き、学校に行けません。そんな孤児やストリートチルドレンを支援するNGOの施設にも図書館車が巡回しており、子どもたちに大人気です。子どもたちが喜ぶ姿を見て、これらの団体から「ぜひうちのスタッフにも図書館活動のノウハウを教えてください」と熱心な要望が寄せられ、図書館活動を1日で学ぶ、集中研修会が開催されました。

場所はブノンペンのスラム4カ所(3カ所はブノンペン最大のゴミ山の周りにできたスラム、1カ所はスラムの移転地)で、3月30日から4月

カンボジア Cambodia スラムで 図書館活動研修会



SVA図書館スタッフによる教材作成指導

2日までの4日間、計40人が参加しました。対象となった団体は、PIO (People Improvement Organization)、J L M (Japan Lay missionary Movement)、PoSE (Four un Sourire d'Enfants)、スラムの移転地にあるローカー・コック小学校です。

まず、SVA図書館事業課インストラクターが読み聞かせを実演しました。それから参加者は図書館活動で使う教材の作成、絵本や紙芝居を使った読み聞かせに挑戦しました。カンボジア事務所の図書館事業課とスラム事業課が協働した、実践的で楽しい研修会となりました。スラムの子どもたちに絵本の楽しさを伝える輪が広がることが期待

(松尾久美)

(手塚耕造)

この活動は、スラムの住人、2割は16歳以下の子どもで

ラオス
Laos
「世界本の日」
記念イベント



教育省から感謝状が送られたNGO団体
(左から3人目が川村)

4月23日は「世界本の日」。これにあわせてラオスでは、4月24日にラオス国立文化ホールにて、読書と基礎教育推進のための記念イベントと会議が開催されました。来場者は教育省を始めとする政府関係者と近隣の小中学生約1000人。

教育省と国際NGOの協力で企画されたこのイベントで、SVAは企画運営、司会、紙芝居やペープサート（紙人形劇）の披露と、重要な役割を担いました。

式典では、教育省副大臣が「2015年までにすべての人に教育をあたえるために、読書や図書の推進が大切である」とスピーチで訴え、NGOを含めた関係機関の協力と努力を求めました。式典のあとは、読書推進に携わる

NGO会員の子どもたちによる劇や読み聞かせが披露されました。小さい時から図書館で読書に親しんできた子どもたちが、それによっていかに能力を高めているかを見ることができました。

またロビーではNGOの事業展示や絵本やノートの配布が行なわれ、来場した子どもたちは楽しみながら、教育と読書の重要性を改めて認識していました。近くの小学校から来たパットくん（10歳）は「たくさんの絵本を見ることができて楽しかった。絵本とノートももらえて嬉しかった」と喜んでいました。

最後には、教育副大臣から国際NGO各団体に感謝状が贈られ、NGOが協力しながら、ラオスの読書推進、教育開発を行なっていくことを合意されました。（川村七）

ミャンマー(ビルマ) 難民
Myanmar (Burma) Refugee Camps
「難民子ども文化祭」
を開催



伝統芸能ステージでは民族の踊りと音楽を披露
(写真: Atsushi SHIBUYA)

「いろんな民族の友だちができて本当にうれしかった。ビルマでは長く民族同士で戦っているけれど、私たちはここで簡単に友だちになれた」と涙声で感想を語ったのは、メンバーのトウイさん（17歳）。イベントをやってよかったと思った瞬間でした。

SVAは、交流キャンプと伝統芸能ステージからなる国際イベント「アジア子ども文化祭」を10年以上開催してきました。その実績を元に「難民子ども文化祭」（3月31日、4月3日）では、ウンビナム難民キャンプに、カレン、ピルマ、モン、カチン、アラカンなど8民族のミャンマー（ビルマ）難民の子ども80人以上が集まりました。

最初はぎこちない子どもたちも、交流キャンプ（特に

SVAラオス事務所制作チーム「ハローマイフレンド」の練習を通して次第に仲良くなり、文化展示やステージ公演（聴衆は1000人以上）では互いの演目を讃え合い、最終日には別れを惜しんで涙するほどの友情を築きました。

大人たちにも大きな影響を与えたのではないかと思います。同キャンプのリーダーであるワ・テイ氏も「大人の役割はこうした平和の種まき。他の難民キャンプでもこのイベントを開催すべきだ」とのコメント。

難民キャンプでもやはり民族間の不和があり、こうしたイベントには民族の交流をはかる大きな意義があります。今後も難民の期待に応えるよう、前向きに取り組んでいきたいと考えています。（小野豪太）

日本
Japan
役員が
改選されました



3月27日の通常総会において、役員候補者選考委員会より新役員案が提案され、今期のシヤンティ国際ボランティア会理事、監事が全会一致で承認されました。今期は新任の理事が3人選ばれています。そして、その後の臨時理事会において、会長、副会長、専務理事、常務理事の執行役員は、前期に引き続き全員の再任が承認され、その職務にあたります。



5月14日午後、SVA 理事・監事研修会を開きました。新任理事3人を加えた理事・監事はまず自己紹介。その後、「理事として取り組みたいこと」を個人で紙に書き出し、グループに分かれて話し合うワークショップを行い、その役割について改めて理解を深めました。

- | | | | |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|  会長 若林 恭英 長野県・安楽寺住職 |  常務理事 倉科 利行 長野県・全久院住職 |  理事 亀崎 弘記 全国電力関連産業労働組合連合会労働政策局長 |  理事 萩野 頼子 ㈱飯能製作所 代表取締役社長 |
|  副会長 神津 佳子 ㈱ケイアンドアイ 代表取締役社長 |  常務理事 早坂 文明 宮城県・徳本寺住職 |  理事(新任) 関 尚士 ㈱シヤンティ国際ボランティア会事務局長 |  理事(新任) 渡辺 恵司 ワタケイ紙器㈱ 代表取締役会長 |
|  副会長 三部 義道 山形県・松林寺住職 |  常務理事 八木 澤克昌 SVAアジア地域ディレクター 兼SVAタイランドアドバイザー |  理事(新任) 永堀 宏美 人材(人財)開発&教育 コンサルタント |  監事 青木 利元 ボランティア活動国際 研究会代表 |
|  専務理事 茅野 俊幸 長野県・瑞松寺住職 |  理事 上原 泰男 東京災害ボランティアネットワーク事務局長 |  理事 野村 修一 弁護士 |  監事 白石 孝 自治労荒川区職員労働組合書記長 |

アフガニスタン
Afghanistan
100日におよぶ
教師研修が終了



紙芝居づくりの研修で
実際に絵を描いている女性教師たち

ジャララバード市内全小学校の教師を対象にした図書館活動の研修が2月に終了しました。JICAの草の根技術協力事業「図書普及活動を通じた初等教育の質的な改善事業」の一環で行われたものです。

ジャララバード市内の学校はマンモス校が多く、平均で1校あたりの生徒数は2800人、教師は59人です。そこで、学校単位で研修を実施することにし、1回あたり教師の参加を50人としました。研修を20回実施し、4カ月間で計1006人の教師が参加しました。

今回の研修は、教師研修の第1回目として、子どもの発達における本や読書の重要性、アフガニスタンの図書館の歴史といった理論が中心でした。

が、演習として、読み聞かせや紙芝居づくりも取り入れられました。5日間の研修後、「絵本を届ける運動」で日本から届いた50冊を含む70冊を各学校に配布しました。

20回の研修を終えた図書館事業課チーフのハニフスタッフは、「国語や道徳の時間に教師が図書室から本を持って行って読み聞かせを行うようになったこと、授業のはじめにゲームを行うようになったことが研修の成果としてあげられます。また、正式に図書室職員を配置している学校は22校のうち9校に増えました。残りの13校も図書室職員の配置を州教育局に要請しています」と手応えを感じています。次回はさらに実践的な研修を行う計画です。（三宅隆史）

Q&A
SVAの「役員」って？

- Q 役員の任期は？**
1期2年です。
- Q 役員の仕事はなに？**
理事……理事会を構成し、事務局からSVA事業についての報告を受け、その評価を行います。また、自分の地域や専門分野において、SVAの裾野を広げる活動も期待されています。
- 監事……**SVAの会計及び事業内容、理事の職務の執行状況を監督、検査します。
- Q 役員は
どうやって選ばれるの？**
改選期の前年に、理事会において役員候補者選考委員会が設置されます。委員は、役員、代議員、会員で構成されます。今回は、三部義道副会長、里見照子理事、三田村昌生代議員、有馬嗣朗代議員、松尾純代社員会員が委員に選出されました。
- その選考委員会により、役員候補者を選出し、通常総会によって承認されます。

日本各地での活動やニュースをご紹介します。



「2009年度通常総会」が開催されました

3月27日（金）、東京新宿区において通常総会を開きました。詳しい議事についてはP.16の報告をご覧ください。



来場者に「クラフト・エイド」の説明をする神崎スタッフ

「アフガン テディベア」をお披露目

4月17日、JICA 地球ひろば（東京都港区）カフェ・フロンティアにて「クラフト・エイド 2009 カタログ」披露・販売会を開催しました。今年のカタログは、フェアトレードの商品を身近に、日常の中で使って欲しいというコンセプトから、「フェアトレードのある1日」と名づけました。

この展示会でぜひ紹介したかったのは、ターバンとブルカを身に付けた「アフガン テディベア」です。いつかは「アフガニスタンのクラフトを！」と願っていた思いが実現し、感無量です。

会場では展示・販売の他に、撮影コーナーを設け、人気のスナップバッグ（カンボジア職業訓練センター製）4種・各6色を揃えた中から、好きなバッグを選んでいただき写真撮影。最高の笑顔と楽しいポーズをリクエストしました。ホームページ <http://sva.or.jp/tsc2009> でご紹介させていただいています。

当日お越しいただいた皆さま、ご協力いただいた皆さま、どうもありがとうございました。（海外事業課 神崎愛子）



アフガニスタンの伝統にもとづき、ブルカをかぶっている女の子のベアも。ブルカの下にはビーズのネックレスをつけ、美しい衣装を着ている。



「世界中の子どもに教育を」キャンペーン 2009

毎年4月に世界で行われる「世界中の子どもに教育を」キャンペーン。日本ではSVAが事務局をつとめ4月20～26日に開催しました。「世界の子どもたちと『読み書き』について考えよう！」をテーマに、全国の小中高校あわせて152校19,683人が、途上国の識字問題についての授業を受けました。

世界には、大人でも文字の読み書きが出来ない人が5人に1人います。文字が読めないことが命の関わる問題になることなど、クイズを通して生徒たちは識字がいかに大切かを知り、教育そして日本の教育協力の大切さに関心を持ち、なにができるのか考える機会になりました。

5月20日には子どもの代表が外務省を訪問し、政務官へ日本の教育協力の拡大をお願いしました。（海外事業課長 伊藤解子）

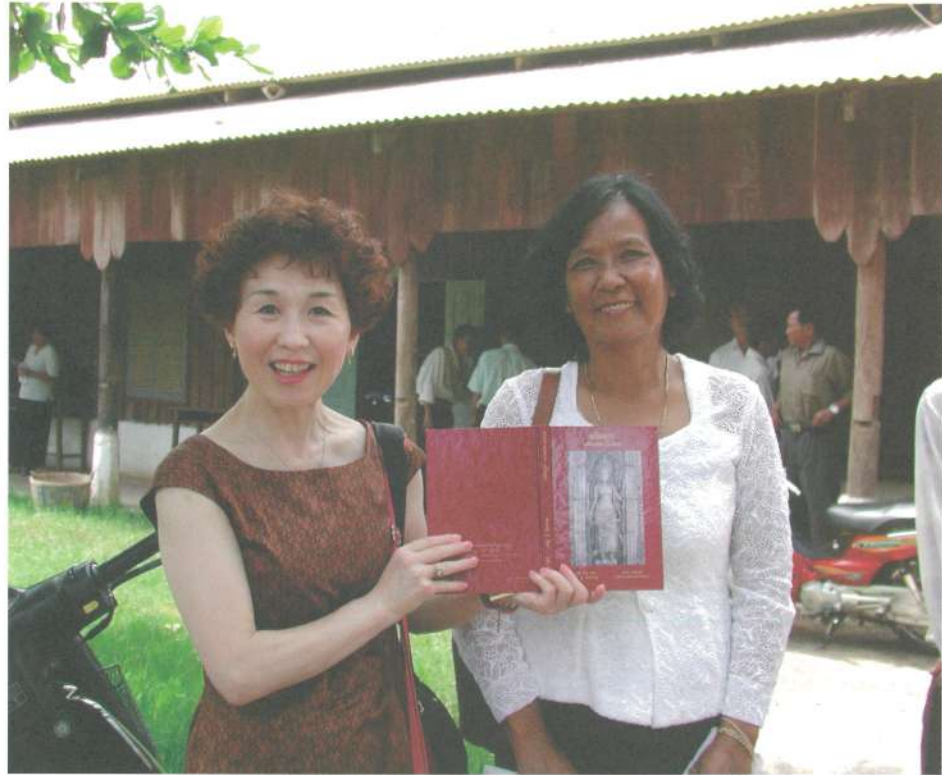


外務省を訪問した子どもの代表と御法川政務官

46 木村瞳 Hitomi Kimura

シヤンティな人たちが Shanti

SVAが難民キャンプ支援を始めた設立当初から、個人でも大洞院でも募金を続けてきたが、現地の状況を知らないでいることに心苦しさがあった。1999年、初めて訪問したカンボジアは酷い悪路。車が走るたび体が飛び上がり天井に頭をぶつけ、こぶができた。トイレを借りるために立ち寄ったカラオケハウスは売春宿で、10



知った人間が責任をもつて一歩を踏み出す

の木（カンボジア初等教育支援の会）を立ち上げた。

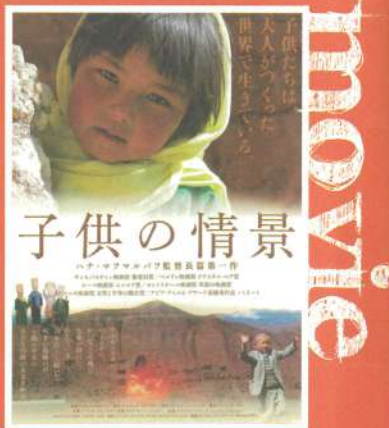
現地で強く感じたのは「平和な社会を築くためには教育が重要」ということ。物を与えることは簡単にできるが、人が育つことが自立への一歩だと思つた。上智大学では比較文化学科で学び、児童文学を神宮輝夫先

生に師事していた。子どもの成長にとつて、大きな力を持つのは子どもの文学だと認識していたこともあって「絵本を届ける運動」に取り組むことにした。絵本を通じて「苦難の中にある子どもたちに普遍的真実を伝え希望と勇気を持ってもらいたい」と願ったからだだった。

ほぼ毎年、今までに7回、カンボジアへのスタディツアーをしている。印象に残っているのは、2004年のツアー。研修会で配布するため、絵本を箱に詰める作業を手伝った。子どもの夢を担う絵本が入った箱の重さは60キロ。38度を超える暑さの中、それを75校分用意した。日本から届いた絵本がこのような重作業を通じて子どもたちの手に渡ることを実感した。自分が訳文を貼った絵本をカンボジアで偶然発見した喜びも忘れられない。

年に数回、開催するチャリティコンサートも28回を数え、地域でも好評だ。クラシック、ジャズ、邦楽、民族舞踊、落語などの多様なジャンルで、遠出の難しい高齢者や障がいのある方にも喜ばれて、地域にも貢献していることを感じる。「ハンカチの木」の活動はカンボジアの子どもたちに夢と勇気を提供し、支援者の日本人も現地の人からエネルギーをもらい自分を見つめなおす機会となる。それをつなぐ橋として、またお寺には地域のコミュニティセンターとしての役割を担ってもらいたい。そう祈りつつ活動を続けている。

（国内事業課長 鎌倉幸子）



子供の情景

「子供の情景」は、大仏の遺跡で有名なバミヤンが舞台。そこに住む6歳の少女バクタイは学校に行きたいと願う。苦勞をしてノートを購入したい。しかし、タリバン軍に殺されている男の子に捕虜にされてしまいます。子どもの視点から、戦争が子どもにも与えた影響など、現在のアフガニスタンの問題を象徴的に表した映画です。もう1本の「タクシー・トゥ・ザダークサイド」は2002年に実際に起こったタクシー運転手の獄死に関する真実を追求したドキュメンタリーです。拘禁施設という密室の中、人権を無視した拷問が行われ、それが「テロとの戦い」の中、正当化されていった事実を関係者の証言を元に描かれています。「アムネスティ・インターナショナル日本」から自主上映会のために借りられます。

表現や視点は違いますが、どちらの映画もアフガニスタンの現実と、戦争の真実・影響を訴えかける強いメッセージ性を持っています。

山田心健

（海外事業課アフガニスタン担当補佐）

2008年度

SVA事業の概要

— 通常総会を開催しました

2008年度は前年度末に明らかとなった構造的な財政問題の克服を最重要課題とし、各国の事業から組織管理・運営に至るまで、見直しと改善に努めました。一方、国内では代議員が中心となった集いや宣言づくり、40カ所を上回る会場で「チャリティ寄席」やチャリティライブを開催、「共感を得る運動体」として新たな展開をスタートしました。

海外では原油高・物価高・ドル

の急激な下落が事業に影響を及ぼしましたが、各事業地で実施体制の見直しと事業評価を踏まえ、質・

効率の改善に努めました。また

7月の洞爺湖G8サミットでは、

NGOフォーラムを通じたODA

教育分野の改善にかかわる提言を

行い、教育協力の拡充が約束され

成果文書に記されました。

緊急救援事業では、ミャンマー

(ビルマ)南部において14万人の犠

牲者を生んだサイクロンの被災者

支援を開始、09年7月まで暮らし

の再建支援を続けています。

財政危機問題の対応としては、

理事・監事・事務局間会議で緊急

会議を開催。公認会計士導入によ

る月次ごとの専門的なアドバイ

体制を確立し、経理ミスを防止す

るため相互チェック体制づくりに

も着手しました。海外事務所との

振替処理など、年度途中からの切

り替えに制約があるものについて

は、次年度から改善を進めていく

予定です。また新公益法人への移

行を念頭に置いた情報収集・シミュ

レーションにも着手しました。

3月27日(金)、真生会館(東京

都新宿区)にて開催された通常総

会では、「2008年度事業報告

及び決算報告」、引き続き審議

された「役員改選について承認を

求める件」「代議員改選について

承認を求める件」について、賛成

多数で可決されました。

2009～2010年度は①

海外事業の質の向上、②海外事務

所の自立運営の促進、③知名度の

向上と一体感の醸成、④財政の安

定化と新公益法人制度への対応、

の4つの柱を重点目標として掲げ、

新たな船出に向かいます。

(事務局長 関尚士)

① 今秋、鎌倉の名刹・建長寺で「チャリティ寄席」

「楽しんで国際協力できるのは嬉しい」と、全国のお寺で大好評のチャリティ寄席。今年も5月12日現在、すでに20回の開催を数え、昨年を上回りそうな勢いです。

そのような皆さんの熱い要望にお応えし、今年も下記のように鎌倉の名刹・建長寺を会場としてSVA主催の「チャリティ寄席・特別公演」を行います。今回は、話題の「仏像ガール」とのコラボレーションなど、ひと味違った企画をめざしています。風薫る秋の鎌倉、観光をかねてぜひお越しください。

(詳細は決定後ホームページに掲載します)

日時：10月12日(月・祝日) 13:30開演
※予定。ご来場前にホームページにてご確認ください

会場：建長寺・龍王殿
神奈川県鎌倉市山ノ内八番地
問い合わせ：東京事務所 大菅・自覚まで
担当◎国内事業課 宗教部門担当

② 領収証発行時期の変更について (口座振替の場合)

口座振替によるご入金につきまして、「前年度1月～12月の会費や募金の合計金額」を記載した領収証を毎年1月下旬にまとめてお送りすることに変更させていただきました。これは送料を軽減して海外活動費に充当するためです。みなさまのご理解をお願い致します。

なお、郵便振替によるご入金は、これまで通り、そのつど領収証をお送りさせていただきます。

担当◎経理総務課 国内事業課

③ 人事のお知らせ

- <異動> 三宅 隆史 企画調査室長から、企画調査室長兼アフガニスタン事務所長兼海外事業課アフガニスタン担当へ(4月1日付)
- 山本 英里 海外事業課アフガニスタン担当兼アフガニスタン事務所所長代行から、ミャンマー(ビルマ)難民事業事務所スタッフへ(5月1日付)
- 藤川 和美 海外事業課タイ担当兼ミャンマー(ビルマ)難民事業担当から、国内事業課クラフト・エイド担当へ(6月1日付)
- 神崎 愛子 国内事業課クラフト・エイド担当から、海外事業課タイ担当兼ミャンマー(ビルマ)難民事業担当へ(6月1日付)
- <退職> 佐藤 麻弥 国内事業課課長補佐(4月23日付)
- 村田 泉 国内事業課スタッフ(4月30日付)



「スタッフの散歩道」は都合により休載いたします。ご了承ください。次号秋号の「散歩道」ではアフガニスタン事務所を取り上げます。どうぞお楽しみに。

スタッフのひとこと 「私の担当は…」

■この6月から、5年ぶりに古巣のクラフトに戻ってまいりました。SVAでは古参のわたくし、今ではなんと3歳の息子がいるマダムスタッフです。久々にクラフトに囲まれて、ほっとするような暖かな気持ちになるのが不思議ですね。これが手作りのぬくもりってやつでしょうか。(クラフト・エイド担当 藤川和美)

■年次報告書などの広報物の制作、プレスリリースの発信、マスコミ対応、イベントの準備、ブログの管理を担当しています。2006年から2年8か月バンコクに住んでいました。上手ではありませんが、タイ語が話せます。2月に入職したばかり。NGO勤務は初めてですが、皆さんに助けられながら毎日楽しく働いています！(広報担当 亀井千寿)

■アフガニスタン事業の担当補佐として、普段は東京での事業調整やご支援者・助成金事業の申請・報告書の準備がおもな仕事です。年に数回アフガニスタンスタッフを日本に招聘する機会があります。現地の様子を直接聞く貴重な機会であり、とても勉強になります。(アフガニスタン担当補佐 山田心穂)

■編集後記 ■静けさに包まれた森の国ラオス、知れば知るほど行きたくくなりますね！今年「日メコン交流年」、テレビでもよく取り上げられるようになりました。ラオスの人は「サバライ(心地よい)」な生活をとても大切にしているそう。みなさんもサバライな夏をお過ごし下さい。(清野陽子)

社団法人 シャンティ国際ボランティア会

〒160-0015 東京都新宿区大京町31 慈母会館2・3階
TEL 03-5360-1233
FAX 03-5360-1220
WEB <http://www.sva.or.jp>
E-Mail info@sva.or.jp
郵便振替 00150-9-61724

● 当会へのご寄付は、所得税および法人税、相続税の優遇措置が受けられます。

「シャンティ」は、FSC 森林認証紙 (SGS-COC-001773) にノンVOCインキ (石油系溶剤 0%) で印刷しています。